拇指末節骨内類上皮嚢腫の1例

浜の町病院整形外科

大石 聡・森 久 喜八郎
岩 城 彰・堤 義 明
徳 永 真 巳・吉 村 一 朗

Intraosseous Epidermoid Cyst in the Distal Phalanx of the Thumb —A Case Report—

by

Satoshi Ohishi, Kihachiro Morihisa, Akira Iwaki,
Yoshiaki Tsutsumi, Masami Tokunaga and Ichirou Yoshimura

Department of Orthopaedic Surgery,
Hamanomachi Hospital, Fukuoka, Japan

Intraosseous epidermoid cysts are rare. A 47 year-old male was seen on October 26th, 1995, complaining of pain and swelling of his left thumb. Thirty years previously, he had sustained an injury on the ulno-palmar side of the distal phalanx of the thumb. He had been shown to have a radiolucent area in the distal phalanx at another clinic, two years prior to visiting our hospital. He had suffered from pain and noticed swelling of the tip of the thumb for two months before presentation. Physical examination revealed a clubbed finger with local tenderness and a small scar. Roentgenogram showed a round radiolucent lesion with expansion and destruction of the cortex. The tumor was encapsulated and filled with atheroma-like material. Microscopically, the cyst wall consisted of stratified squamous epithelium. The cyst was filled with horny material arranged in laminated layers. We surmise that the past trauma is implicated as the cause of this condition, and highly proliferative tissues of the finger tip were implanted into the distal phalanx. On roentgenogram it is very difficult to distinguish an epidermoid cyst from other intraosseous tumors or tumorous conditions.

Key words: epidermoid cyst (類上皮嚢腫), intraosseous (骨内), post traumatic (外傷後), clubbed finger (太鼓ばち指)

はじめに

手指に発生する類上皮嚢腫は稀ではないが、骨内発生は稀である。今回我々は拇指末節骨骨内に発生したと考えられる類上皮嚢腫の1例を経験したので報告する。

症 例

症例: 47歳, 男性。主訴: 左拇指の腫脹, 疼痛。
現病歴: 2年前転倒した際, 偶然, レ線上円形透亮像

を指摘された。2カ月前, 圧痛および腫脹を自覚し, レ線上透亮像拡大を指摘され, 平成7年10月26日当科を紹介受診した。既往歴: 30年前, 左拇指を車のファンベルトに挟み切創を負い縫合処置された。レ線上特に問題はなかった。

現症: 末節は腫脹し, 爪は彎曲し, 太鼓ばち指様を呈した。圧痛を認めたが, 知覚障害は認めなかった。掌尺側に線状創痕を認めた(図1)。

レ線像: 2年前のレ線では, 透亮像周囲の骨硬化像及び皮質骨の膨隆を認めるが, 皮質骨の破壊は認めな

図1 現症

末節は腫脹し、爪は湾曲し、太鼓ばち指様を呈す。圧痛を認めるが、知覚障害無し。掌尺側に線状創瘢痕を認める。

図2 単純レ線 2年前

透亮像周囲の骨硬化像及び皮質骨の膨隆を認めるが、皮質骨の破壊は認めない。石灰化も認めない。

図3 単純レ線 拡大像 当科初診時

尺側に偏位した円形透亮像を認め、周囲僅かに骨硬化し、一部皮質を破壊している。石灰化等は認めない。

図4 標本

腫瘍内はアテローム様の粥状物質にて満たされていたが不快な臭いはなかった。

図5 組織像

外層から薄い結合織、平坦な基底層、有棘層、顆粒層、角化層よりなる重層扁平上皮に囲まれ、内部は層状の角化物で満たされていた。皮脂腺等の皮膚付属器官は認めず類上皮嚢腫と診断された。

い。石灰化も認めない(図2)。当科初診時のレ線では、尺側に偏位した円形透亮像を認め、周囲僅かに骨硬化し、一部皮質を破壊している。石灰化等は認めない(図3拡大像)。

手術所見：尺側正中縦切開にて摘出術を施行した。腫瘍は1cm大ほぼ球形で、白色のやや厚いカプセルに包まれ、周囲との癒着はなく、容易に摘出できた。レ線にて皮質骨のブルーニング様の陰影が見られた部は、明らかな骨様組織は認めなかった。腫瘍周囲の反応性骨硬化部を搔爬、ドリリングし、肘頭から採取した海綿骨及び皮質骨を充填した。腫瘍内はアテローム様の粥状物質にて満たされていたが不快な臭いはなかった(図4)。

組織像：外層から薄い結合織、平坦な基底層、有棘層、顆粒層、角化層よりなる重層扁平上皮に囲まれ、内部は層状の角化物で満たされていた。皮脂腺等の皮

図6 単純レ線 術後6カ月
再発は認めず、症状も消失した。

膚付属器官は認めず類上皮嚢腫と診断された(図5)。

術後6カ月では再発は認めず、症状も消失していた(図6)。

考 察

1923年 Sonntag が第一例を、本邦では1956年大橋が第一例を報告している¹¹⁾。渉猟し得た範囲では本邦で48例の報告がある⁸⁾。

病因としては胎芽細胞遺残説⁶⁾と上皮迷入説²⁾が提唱されている⁴⁾が、本症例では明らかに局所の外傷の既往があり、また2年間のレ線経過からも、外傷の際に骨内に迷入移植された爪部組織が増殖したと推察される。

また本邦では末節骨発生例が98%近くを占めている⁸⁾が、その理由として末節部は、外傷を受けやすく、爪部組織が迷入し易い。一度発生すると爪の存在により骨方向に侵蝕しやすい。という条件があり、侵蝕性骨嚢腫としての類上皮嚢腫を生じやすい³⁾¹⁰⁾。と考えられている。

更に、稀ではあるが再発例や、足部においては悪性化例の報告⁵⁾もある。

レ線所見からは多くの腫瘍、腫瘍性病変が鑑別診断として考えられるが、最終的にレ線所見だけでは鑑別不能と考える。

その中で、手指骨腫瘍の90%を占めると言われる内軟骨腫との鑑別点を挙げるとすれば、内軟骨腫は骨の中心性でDIP関節に接するような基部に存在することが多いのに対し、類上皮嚢腫は偏在性で爪下部や、末梢部に存在することが多い。内軟骨腫は石灰化や多房状を呈することがあるが、類上皮嚢腫は石灰化を認めず、ほぼ円形で辺縁平滑、周囲に僅かに骨硬化像を認める¹⁾⁷⁾⁹⁾。などが考えられる。

ま と め

拇指末節骨内類上皮嚢腫の1例を経験したので報告した。本症例では外傷による上皮迷入説が支持される。レ線所見だけでは他の腫瘍、腫瘍性病変とは鑑別不能と思われた。

参 考 文 献

- 1) Barbara, Monsees and William, A. Murphy: Distal phalangeal erosive lesions. *Arthritis and Rheumatism*, Vol. 27: 449-455, 1984.
- 2) Franke, F.: Ueber die Epidermoide (Sogenannte Epithelcysten). *Deutsche. f. Chir.*, 40: 197, 1894.
- 3) 古谷正博ほか: 手指末節骨に生じた嚢腫様骨病変の検討. *東日本臨整会誌*, 1巻: 268-272, 1989.
- 4) 石田龍吉ほか: 手指末節骨に発生した epidermoid cyst の検討. *日手会誌*, 7巻: 515-519, 1990.
- 5) 三井宜夫ほか: 悪性化をきたした epidermoid cyst の1例. *臨床整形外科*, 12巻: 57-60, 1977.
- 6) Reverdin, J. L.: Des Kystes epidermiques des doigts. *Re. Med. Dela Suisse Rom.*, 7: 121, 1887.
- 7) S.N. Jones and D.J. Stoker: Radiology at your fingertips; Lesions of the terminal phalanx. *Clinical Radiology*, 39: 478-485, 1988.
- 8) 宇南山賢二ほか: 中指末節骨に発生した類上皮腫の1例. *関東整災誌*, 26巻: 190-194, 1995.
- 9) 薄井正道ほか: 手指末節骨が cystic lesion を呈する疾患について. *臨床整形外科*, 13巻: 514-522, 1978.
- 10) 安田 浩ほか: 木片の刺入で生じたと思われる手指末節骨内類上皮嚢腫の1例. *形成外科*, 33巻: 437-441, 1990.
- 11) 横山一彦ほか: 右示指末節骨内に生じた Epidermoid cyst の1例. *関東整災誌*, 15巻: 421-425, 1984.